２０２４年９月８日聖霊降臨後第１６主日説教

イザヤ書３５章４－７節ａ
ヤコブの手紙１章２７－２７節
マルコによる福音書７章３１－３７節

本日の旧約日課は、イザヤ書の回復についての預言部分です。聖書日課は４節からですが、３５章全体が回復について語っています。聖書日課ではありませんが、３５章１節は、「**荒れ野と乾いた地は喜び、砂漠は歓喜の声を上げ、野ばらのように花開く**」と始まります。荒野と砂漠が喜ぶという表現は、乾燥したイスラエルの地域ならですが、花に関する言及も同じです。わたしたちの教会の庭は一年中お花が咲いています。先週から聖堂の献花も再開しました。わたしたちにとって、お花が咲いているのは珍しいことではありませんが、聖地イスラエルにおいては、花が咲く、そのことだけでも、主なる神様の恵みと守り、喜びの象徴なのです。

花が喜びを示すことは、２節に続きます。そこには「**花は咲き溢れ、大いに喜びの歌声を上げる。レバノンの栄光とカルメルとシャロンの輝きが砂漠に与えられる。人々は主の栄光と私たちの神の輝きを見る**」とあります。「レバノン、カルメル（山）、シャロン（平野）」、これらはエルサレムよりも南の砂漠地帯に比べれば、緑豊かな地域です。砂漠の地域にも自然の豊かさが与えられ、その現象的変化を通して、人々は主の栄光と彼らの神の輝きを見る、と告げるのです。「栄光」と「輝き」、漢字では同じように思えてしまいますが、ニュアンスが少し異なります。聖書における「栄光」は、本質の現れ、「輝き」は、飾りのように表面が輝くことです。「栄光と輝き」とは、見ることのできない本質、見ることのできる素晴らしさ、その両方の回復を語っているのです。

３節には「**弱った手を強くし、萎えた膝を確かにせよ**」とあり、この部分は、聖書日課の５節と同じような内容といえます。しかし、こちらは回復の現象に対する表現ではなく、それを受け止める人たちに対する姿勢について語っています。すなわち、失望して何できないと思っても、また立ち上がることができないと思っても、力を得なさいということです。それゆえ、その内容は、４節に続きます。ここからが聖書日課です。「**心を騒がせている者たちに言いなさい。『強くあれ、恐れるな。見よ、あなたがたの神を。報復が、神の報いが来る。神は来られ、あなたがたを救う』**」。「心を騒がせている者たち」は、新共同訳で「心おののく人々」、口語訳で「心おののく者」となっていました。「心」は共通ですが、その状態を示す部分の訳が変わりました。原語は「急ぐ、慌てる」という意味ですから、「心騒がせている」という訳が元の意味に近いといえます。「強くあれ」は、新共同訳では「雄々しくあれ」となっていました。口語訳では「強くあれ」でした。原語は、「強く」という意味ですから、新共同訳は意訳です。何に対して「恐れるな」と呼びかけるのか書かれていませんが、様々な意味でイスラエルに対する脅威でしょう。

４節後半は、そのように勧められる根拠が記されています。ただし、その部分は、『聖書』によって訳が少し異なります。聖書協会共同訳は、「**見よ、あなたがたの神を。報復が、神の報いが来る**」、新共同訳は、「**見よ、あなたたちの神を。敵を打ち、**

悪に報いる神が来られる」、口語訳は、「**見よ、あなたがたの神は報復をもって臨み、神の報いをもってこられる**」です。「見よ」と始まる点は同じですが、続く部分が異なります。もし単純に直訳するならば、「見よ、あなた方の神を、報復が来る、報いが」となります。訳はそれぞれですが（新共同訳の意訳が目立ちますが）、ここで注目すべきは、「あなたがたの神を見よ」と「あなたがたの」となっている点です。イスラエルにとって主なる神様を他の神々と比較することは許されないのです。そして、もう一つは、「報復」「報い」が主なる神様のなさることであるという点です。「報復」は、文字通り復讐であり危害・損害に対してやり返すこと、「報い」は、どちらかという経済的な償いなどの意味ですが、ニュアンスが異なります。しかし、それらは主なる神様のなさることなのです。そして、そうであるがゆえに、主なる神様がイスラエルを救うと断言されるのです。また、そのような主なる神様の報復・報いを通した救いであるからこそ、しるしとして、５節、６節の身体的変化、環境的変化が起こると語られるのです。聖書日課は、７節の前半で終わっていますが、そのあとも回復の表現は続き、この３５章は、１０節「**主に贖い出された者たちが帰って来る。歓声を上げながらシオンに入る。その頭上にとこしえの喜びを戴きつつ。喜びと楽しみが彼らに追いつき悲しみと呻きは逃げ去る**」で終わります。

この預言がいつの時代のことなのかは、定かではありません。続く３６章は、アッシリア王センナケリブの南ユダ王国に対する攻撃について記しており、それは北イスラエル王国の滅亡後、ユダ王国が滅亡・バビロン捕囚の前です。しかし、おそらく、この部分は、バビロン捕囚以後、南北イスラエルの滅亡後に書かれたと思われます。ただし、大切なのは、背景にある歴史的出来事がなんであるかではなく、何があっても主なる神様を信じ、その方が報いてくださるという信仰に立つことです。すなわち、主なる神様は、信じる人々の声を聞き、人間の力では起こすことのできないような現象を伴い、イスラエルに救いが訪れると信じることです。

本日の福音書は、イエス様が「**耳が聞こえず口の利けない人**」を癒やされる典型的な奇跡物語です。人々の反応は「**そして、すっかり驚いて言った。『この方のなさったことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてくださる』**」というものでした。この反応には、今見てきたイザヤ書あるいはそれに類する期待があったと思います。確かにその期待において、イエス様は、イザヤ書の預言を実現する方であるともいえます。しかし、イエス様は、イザヤ書の預言も超えた方です。この地上での回復だけではなく、死を超えた、すなわち時間も空間も超えた回復を示してくださったからです。そして、そうであるがゆえに、イスラエルに限定されず、死を迎えるすべての人の救いとなったからです。

わたしたちの生きている現在は、イザヤ書の時代より進歩していると思えますが、身体的苦しみの解決や環境的な困難さの解決という意味では、イザヤ書の時代とあまり変わりません。それは救いの完成が、人間的な進歩や努力の先にはないことを意味しているのでしょう。しかし、時間と空間を超えた救いを示すイエス様を信じて歩むとき、その救いは与えられるのだと思います。わたしたち一人ひとりの上に、そして、それだけはなく、人間では技術的に解決できない事柄でも、救いへ転換する現象を伴った救いも起こすのだと思います。その救いが実現する未来のために、これからもともに礼拝を続けたいと思います。